

「ルーマニア民族舞曲」では楽しい時間を過ごした。2曲目から余分な音が聞こえなく、必要な音だけが鳴っており、集中できる澄みきった時間であった。3曲目と4曲目は、夜の音楽というか、踊りを意識させない位ゆったりとしており静寂であった。この演奏家のバルトークは鋭利な刃物ではない。荒々しい切り口を感じさせない。銜いがなく、雑でなく、丁寧できれいなカッシリとした切り口である。ベロフやコチシュを意識させない、このピアニストだけのものを感じた。

ショパンのバラードの4番については、展開部に入るところの和音、追っかけて、積み重ねて広がっていく様に感じる部分。最後近くの細かな音。そして、最後の止まったカナと思わせた後の和音については、エッ、こんな音もありということでハッとさせられた。ただ、中間の朗唱部分では、脆弱なショパンであり、迫力に欠けており、私の考える男らしいものではなかった。

シューマンの「交響的練習曲」は、11曲目がすごくキレイであった。美しい音楽という事実しかない様であった。音楽に聴き入りながら、心から楽しんで演奏していた。全体を支配しているのは、フロレスタンで、9曲目と11曲目と12曲目の一部にしかオイゼビウスが出てこなかった気がする。オイゼビウス(O)的な主題をフロレスタン(F)的な気持ちで演奏していく。声がだんだん張りを増し、大きく響いていく。11曲目はどっちなのか、心情的にはOだが、朗々と明確に弾けば弾くほどFなのか。O的な部分が多い演奏、ポリーニさんの2回目の来日の時のもの(NHKで何度か放映された)、ジャン・フィリップ・コラールさんのレコードが好きである。なお、遺作の変奏はなかった。

スクリャービンは、私の考えているものとは少し違った。海の中から、無数のアワが沸き上がり、大きいのが小さいのがボコボコするのを期待した。光は意識しなかったが、キラキラする色彩を楽しみにしていた。余分な音が雑然としており、何かセレクトされていないものを感じた。静かな夜の海の中であるのだろうが、ゆったりとし過ぎて躍動に欠けている。第2楽章の波にしても、高くなって高くなって白い波になるのが、最高の位置に行く前にはじけてしまうのが残念である。もう一つ描ききっていないし、もう少し雄弁であってもよい気がする。私には、ポゴレリッチさんの幻想ソナタのイメージが強すぎるのか。

---

スクリャービン：ピアノソナタ 第2番 嬰ト短調 Op.19「幻想ソナタ」

バルトーク：6つのルーマニア民族舞曲 Sz.56

ショパン：バラード 第4番 ヘ短調 Op.52

シューマン：交響的練習曲 Op.13

(アンコール)

ランゲ：花の歌

---

